

令和 7 年度一般選抜  
個別学力試験問題(前期日程)

小 論 文

(教育学部 学校教育課程 I 類)

注 意

1. 問題紙は指示があるまで開いてはいけません。
2. 問題紙は 20 ページ，解答用紙は 7 枚，下書き用紙は 7 枚です。指示があってから確認し，7 枚すべての解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください。
3. 問題 **1** は必答問題です。受験生は必ず解答してください。  
問題 **2** ・ **3** は選択問題です。 **2** ・ **3** のいずれかを選択し，  
**2** を選択した場合は解答用紙 **3** の選択欄に， **3** を選択した場合は  
解答用紙 **6** の選択欄に○印を記入の上，解答してください。解答用紙  
の選択欄に○印のないもの，解答用紙 **3** と **6** の選択欄両方に○印が記  
入されているものは，採点しません。
4. 答えはすべて解答用紙の所定のところに記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 試験終了後，問題紙・下書き用紙は，持ち帰ってください。

1

【必答問題】 以下の設問(一)・設問(二)にすべて答えなさい。

設問(一) 次の課題文を読み、以下の問1・問2に答えなさい。

### 課題文

かつては、「いじめ」というと、力の強い者が弱い者をいじているというイメージがありました。「ガキ大将」のような典型的ないじめっ子のタイプ、逆に、典型的ないじめられっ子のタイプといったものです。こうしたイメージは、誰もが想像しやすいものですし、いじめの一般的なイメージとして日本社会に浸透しています。確かに、かつてはこうした形のいじめも少なくありませんでした。しかし、こうした典型的ないじめの形にとらわれることは、今日のいじめを理解するうえで有効ではありません。

今日のいじめは、むしろ、様々な要因が重なって複雑化していることに加えて、その光景があまりにも日常化しているために見えにくく、発見しにくいものになっていることを理解する必要があります。

### 見えにくい今日のいじめ

まず、今日のいじめの特徴としてあげられるのは、いじめの「日常化」という側面です。つまり、いじめとは、ある時、異常な行動として突発的に起こるといったものではありません。かなり頻繁に、そして日常的・継続的に行われているのです。しかも、特に「荒れた学校」と呼ばれるような特定の学校で起きるものでもありません。どの学校、どの学級でも起こりうるし、実際に起きていてもおかしくないのです。

第二の特徴としてあげられるのが、いじめの「流動化」です。かつてのイメージのように特定のいじめられやすい子どもが、常にいじめのターゲットになる状況とは異なり、むしろ誰もが加害者にも被害者にもなる可能性があることが、今日のいじめの大きな特徴です。つまり、被害者と加害者の関係性には「流動性」が見られるのです。

第三の特徴としてあげられるのが、いじめの「透明化」という問題です。第

一、第二の特徴でみたように、今日のいじめは、どこの学校でも日常的に起こりうる、あるいは起きている問題であり、また、被害者、加害者の関係性も流動化しているのです。

こうなると、従来のような、特定のいじめられっ子がいじめられている場合と違い、学校や親もいじめの存在自体を見つけることが難しくなります。つまり、第一の特徴である「日常化」、第二の特徴である「流動化」の結果、いじめそのものが見えにくく、見つけにくくなるのです。この現象を、いじめの「透明化」と呼ぶことにします。

### 閉じられた友だち関係の中で

子どもたちをめぐる環境の変化は、いじめをますます見えにくくし、しかも、いじめの深刻化を招きやすい条件を作っています。まず、子どもたちどうしの関係性がどう変化しているのか、そのことが、いじめとの関係でどのような問題を含んでいるのかを検討してみましょう。

かつてもそうですが、いじめの多くは、子どもどうしの「遊び」「ふざけ」から発展する場合があります。遊び半分で、ふざけてからかっていたり、ちょっかいを出したりしていたことが、やがて被害者に大きな心理的・身体的な負担やダメージをもたらすことになり、それがいじめへと発展していくという流れです。発達・成長段階にあり、人格としても未成熟な子どもたちは、他者との人間関係の結び方そのものを学んでいる最中であり、他者の気持ちをすぐに想像することができないからです。

こうしたいじめに至る基本的な構造自体は、今日においても共通しています。しかし、学校における、子どもたちの関係性が、かつてと現在とではかなり違うのです。今日、クラスの中では、だいたい、一見すると仲の良い、数人の気が合う子どもたちどうしでつくられたグループがいくつか形成されています。そして、子どもたちの緊密な関係性は、その数人のグループの中で序列を生みながら結ばれています。グループ内の子どもとは活発に交流しますが、グループ外の子どもとの交流は希薄であることが一般的です。

もちろん、かつて「仲良しグループ」というものは存在しました。しかし、

子どもたちは、その「仲良しグループ」だけに属するのではなく、そのグループ外にも様々な交流のルートをもっていました。学校が終われば、放課後には、学校のクラスとは別の、地域の異年齢集団の中で遊び、その中で多様な関係性を築いたり、友だち以外にも親や兄弟、あるいは地域の大人など、いろいろな関係性に支えられながら育っていたのです。

しかし、今日では、そうした多様な関係性が少なくなり、学級の中の特定の友だち関係のみが、子どもたちの関係性のほとんどを占めるようになっていきます。そこには、ケータイやインターネットの影響なども顕著になっています。一見すると、「仲良しグループ」にみえるため、その中での「遊び」「ふざけ」が徐々に、いじめという深刻な問題に質的に変化をしていっても、外部からいじめと見分けることには困難が生じます。

しかも、加害者側も、相手に深刻な被害を与えながらも本気で「遊び」「ふざけ」と認識しているケースもめずらしくありません。被害者がいじめを苦に自死するような深刻なケースでも、加害生徒が「遊びのつもりだった」と述懐する事例が少なくありませんが、それは本心であるからこそで、必ずしも、加害生徒が自己弁護をしているだけとは言い切れないのです。

### 閉じられた関係の中で

こうした子どもたちの関係性の質的な変化は、いじめを見えにくくするだけではなく、いじめの深刻化にもつながる危険性があります。

教育社会学者で大阪市立大学名誉教授の森田洋司氏が、1997年に、全国の小学5年生から中学3年生の6906人を対象に実施した調査によれば、いじめた子どもの八割は同じクラスの子だったとのこと。また、いじめられる場所は、教室が75パーセントと圧倒的に多いという結果も出ています。

このように、いじめは、閉じられた人間関係の中で起きるものです。逆に、何らかの人間的な関係性が成立していなければ、いじめは発生しません。したがって、いじめが学校の友だち関係の中で起きているという森田氏の指摘は的を射ています。また、私の先の指摘でいえば、閉じられた「仲良しグループ」の中で、いじめが発生するという事に重なります。

ただし、先述したように、かつて子どもたちは学校の外で、様々な関係性をつくることができました。学校の関係性だけに閉じてなければ、仮に学校でいじめに遭っても、子どもたちにとっては、まだ「逃げ場」がいくつか存在するわけです。学校でいじめに遭っても、別の集団の中に自分の居場所があれば、そこで自己肯定感を見出し、自分らしさや自信を回復することも可能です。そして、学校とは別の関係性の中で、いじめに遭っているという「SOS」を発信することも可能です。

しかし、いま、そうした「逃げ場」が子どもたちから、急速に失われてしまっているのです。「逃げ場」がないため、いじめられていても、その関係性から逃れることができない。こうした子どもたちの人間関係の変化も、いじめが深刻化する理由として見逃すことはできません。

(尾木直樹『いじめ問題をどう克服するか』による。なお、出題にあたり本文の一部を改変した。)

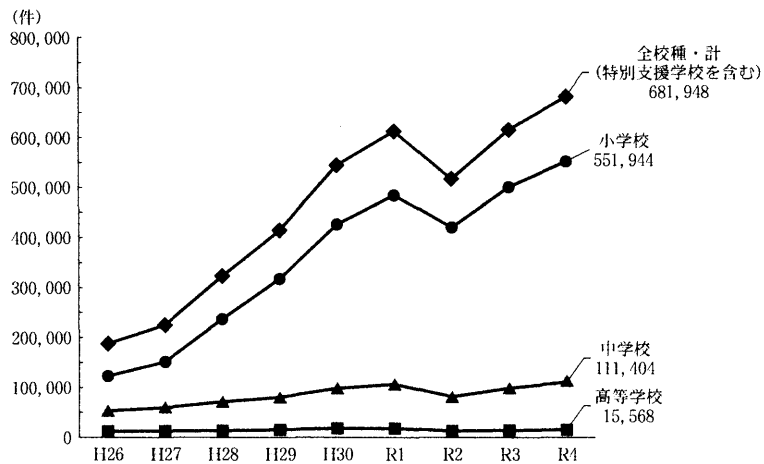
問 1 課題文中に述べられている「今日のいじめの特徴」について、200字程度(句読点を含む)で説明しなさい。

問 2 下線部にある「いじめの深刻化」が生じる理由について、200字程度(句読点を含む)で説明しなさい。

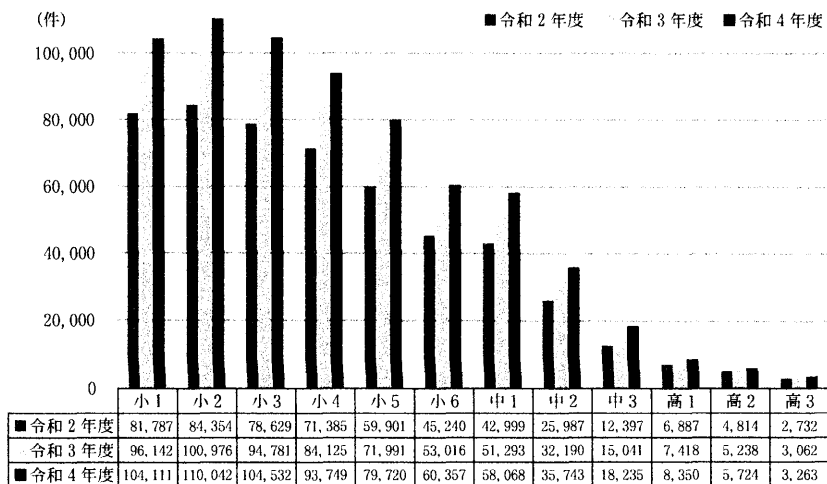
設問(二) 以下の資料1～3をみて、次の問いに答えなさい。

問い 資料1～3から読み取れる近年のいじめの傾向について、350字程度(句読点を含む)で説明しなさい。なお、資料1～3すべてに言及すること。

資料1 いじめの認知件数の推移



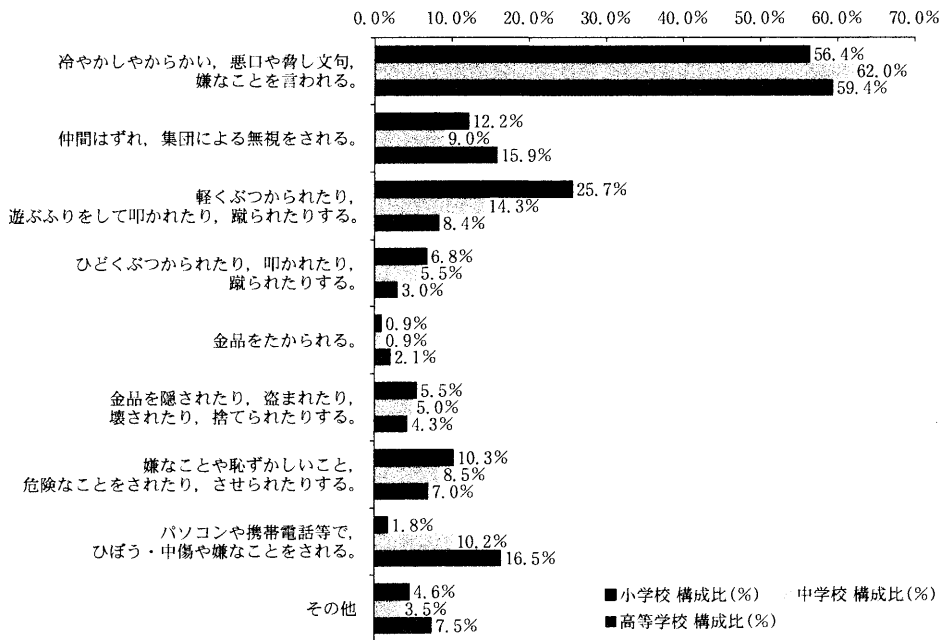
資料2 学年別いじめの認知件数の推移



※ 各学年の認知件数には、特別支援学校小学部・中学部・高等部の認知件数を含む。

(注) いじめの認知件数とは、教職員が認知できた件数を指しており、必ずしも発生件数とは一致しない。

資料3 いじめの態様別状況(令和4年度)



(注) 構成比は、各区分における認知件数に対する割合で、回答は複数回答式である。

(資料1～3とも、文部科学省「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」による。なお、出題にあたり資料の一部を改変した。)

2

【選択問題】 以下の設問A・設問Bにすべて答えなさい。

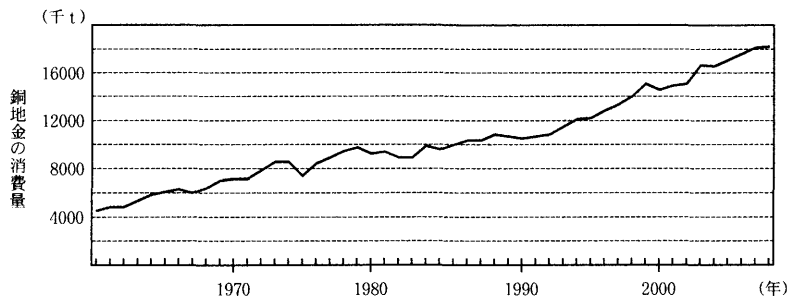
設問A 次の文章と資料1・資料2をみて、以下の問1～問3に答えなさい。

私たちの身の回りでは、鉄や銅など、多くの金属が利用されています。日本は、鉄鋼の生産に必要な鉄鉱石をすべて輸入に依存しており、輸入量のうち約60%をオーストラリア産が占めています。この鉄鉱石(赤鉄鉱)は、27億年前～24億年前に、光合成生物が放出した酸素と海に溶けていた鉄イオン(Fe<sup>2+</sup>)<sup>①</sup>が結びつき、沈殿して形成されました。日本にはこのようにしてできた鉄鉱石はありませんが、花こう岩などに含まれる砂鉄(磁鉄鉱)を取り出し、古くから<sup>②</sup>「たたら製鉄」と呼ばれる方法によって製鉄が行われてきました。

銅の生産に必要な銅鉱石に関しても、日本には多くの銅鉱山があり、江戸時代の中頃には日本は世界最大の銅生産国であったと言われています。しかし、現在日本で採掘している銅鉱山はなく、銅鉱石はすべて輸入に依存しており、世界の銅供給事情に左右されています。

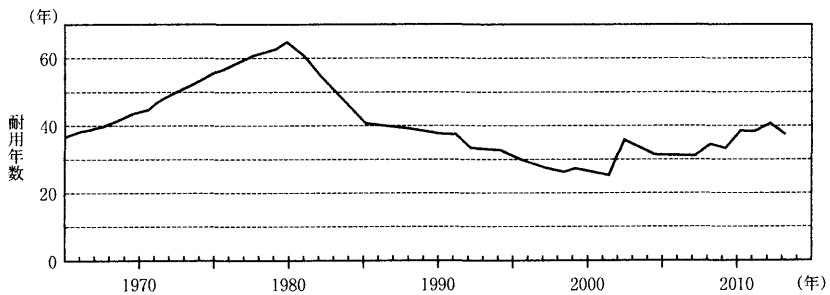
次に示す資料1は、世界の銅地金消費量を示しています。銅地金とは、純度99.96%以上の銅の板状原料製品のことで、資料2は、銅の耐用年数を示しています。銅の耐用年数とは、該当年に見積もられる銅鉱石の埋蔵量を該当年の銅鉱石の生産量で割った数値として定義されるもので、該当年において採掘可能と見込まれる年数を示しています。該当年の埋蔵量は、採掘技術の進歩や新しい鉱山の発見などによっても変化します。

### 資料1 世界の銅地金消費量



(環境省「平成 25 年版 環境・循環型社会・生物多様性白書」の図を一部改変。)

### 資料2 銅の耐用年数



(西山孝「資源論 メタル・石油埋蔵量の成長と枯渇」の図を一部改変。)

問 1 下線部①について、物質が酸素と結びつく化学反応のことをなんというか。

問 2 下線部②に関連して、Aさんは、アルミニウムと主に磁鉄鉱からなる砂鉄を燃焼させて単体の鉄(Fe)を取り出す方法があることを知った。磁鉄鉱の組成は $\text{Fe}_3\text{O}_4$ である。以下はAさんが調べた実験の方法である。

- ①砂鉄とアルミニウム粉末を混ぜ、るつぼに入れる。
- ②導火線としてマグネシウムリボンを①のるつぼに差し込み、火をつけて砂鉄とアルミニウム粉末を反応させる。
- ③燃焼が収まったら、できた塊を取り出して水で冷やす。
- ④塊をハンマーでたたき、中身を取り出す。

この実験において、砂鉄とアルミニウム粉末を混ぜるのはなぜか。50字程度(句読点を含む)で説明しなさい。

問 3 あなたが考える銅の利用の望ましい将来について、資料1・資料2の両方に言及した上で200字程度(句読点を含む)で述べなさい。

設問B 次の文書は、「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律施行令(平成十八年政令第三百七十九号)」(以下、バリアフリー法施行令と略す)の一部です。これを読んで以下の問1～問3に答えなさい。

(階段に代わり、又はこれに併設する傾斜路)

第十三条 不特定かつ多数の者が利用し、又は主として高齢者、障害者等が利用する傾斜路(階段に代わり、又はこれに併設するものに限る。)は、次に掲げるものでなければならない。

一 勾配が十二分の一を超え、又は高さが十六センチメートルを超える傾斜がある部分には、手すりを設けること。

二 表面は、粗面とし、又は滑りにくい材料で仕上げること。

三 その前後の廊下等との色の明度、色相又は彩度の差が大きいことによりその存在を容易に識別できるものとする。

四 傾斜がある部分の上端に近接する踊場の部分(不特定かつ多数の者が利用し、又は主として視覚障害者が利用するものに限る。)には、視覚障害者に対し警告を行うために、点状ブロック等を敷設すること。ただし、視覚障害者の利用上支障がないものとして国土交通大臣が定める場合は、この限りでない。

(注) 明度——色の明るさの度合いのこと。

色相——赤、橙、黄、緑、青のような色みの違いのこと。

彩度——鮮やかさや地味さの度合いのこと。

前ページに示した文書の下線部に記載されている勾配は、下の図1のように、水平距離に対する高低差を示しており、

$$\text{勾配} = \frac{\text{高さ}}{\text{水平距離}}$$

で求めることができます。

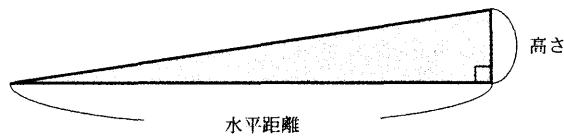


図1

問1 下の図2のような不特定かつ多数の者が利用する傾斜路が階段に併設されています。バリアフリー法施行令第十三条によれば、この傾斜路に手すりを設ける必要はありますか。解答欄の必要あり・必要なし of どちらかを選び、○で囲みなさい。また、そのように判断した理由を解答欄に収まるように書きなさい。

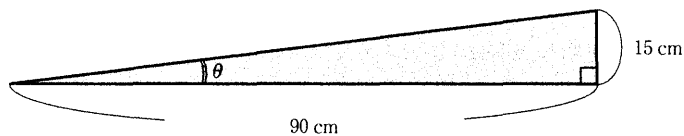


図2

問2 問1の傾斜路のθはおよそ何度ですか。角θは、小数第一位を切り捨て、整数で答えなさい。解答欄には、解答に至る過程も式および文で書きなさい。なお、必要に応じて、三角比を示した表を用いなさい。

三角比の表

| 角   | 正弦 (sin) | 余弦 (cos) | 正接 (tan) |
|-----|----------|----------|----------|
| 0°  | 0.0000   | 1.0000   | 0.0000   |
| 1°  | 0.0175   | 0.9998   | 0.0175   |
| 2°  | 0.0349   | 0.9994   | 0.0349   |
| 3°  | 0.0523   | 0.9986   | 0.0524   |
| 4°  | 0.0698   | 0.9976   | 0.0699   |
| 5°  | 0.0872   | 0.9962   | 0.0875   |
| 6°  | 0.1045   | 0.9945   | 0.1051   |
| 7°  | 0.1219   | 0.9925   | 0.1228   |
| 8°  | 0.1392   | 0.9903   | 0.1405   |
| 9°  | 0.1564   | 0.9877   | 0.1584   |
| 10° | 0.1736   | 0.9848   | 0.1763   |
| 11° | 0.1908   | 0.9816   | 0.1944   |
| 12° | 0.2079   | 0.9781   | 0.2126   |
| 13° | 0.2250   | 0.9744   | 0.2309   |
| 14° | 0.2419   | 0.9703   | 0.2493   |
| 15° | 0.2588   | 0.9659   | 0.2679   |
| 16° | 0.2756   | 0.9613   | 0.2867   |
| 17° | 0.2924   | 0.9563   | 0.3057   |
| 18° | 0.3090   | 0.9511   | 0.3249   |
| 19° | 0.3256   | 0.9455   | 0.3443   |
| 20° | 0.3420   | 0.9397   | 0.3640   |
| 21° | 0.3584   | 0.9336   | 0.3839   |
| 22° | 0.3746   | 0.9272   | 0.4040   |
| 23° | 0.3907   | 0.9205   | 0.4245   |
| 24° | 0.4067   | 0.9135   | 0.4452   |
| 25° | 0.4226   | 0.9063   | 0.4663   |
| 26° | 0.4384   | 0.8988   | 0.4877   |
| 27° | 0.4540   | 0.8910   | 0.5095   |
| 28° | 0.4695   | 0.8829   | 0.5317   |
| 29° | 0.4848   | 0.8746   | 0.5543   |
| 30° | 0.5000   | 0.8660   | 0.5774   |
| 31° | 0.5150   | 0.8572   | 0.6009   |
| 32° | 0.5299   | 0.8480   | 0.6249   |
| 33° | 0.5446   | 0.8387   | 0.6494   |
| 34° | 0.5592   | 0.8290   | 0.6745   |
| 35° | 0.5736   | 0.8192   | 0.7002   |
| 36° | 0.5878   | 0.8090   | 0.7265   |
| 37° | 0.6018   | 0.7986   | 0.7536   |
| 38° | 0.6157   | 0.7880   | 0.7813   |
| 39° | 0.6293   | 0.7771   | 0.8098   |
| 40° | 0.6428   | 0.7660   | 0.8391   |
| 41° | 0.6561   | 0.7547   | 0.8693   |
| 42° | 0.6691   | 0.7431   | 0.9004   |
| 43° | 0.6820   | 0.7314   | 0.9325   |
| 44° | 0.6947   | 0.7193   | 0.9657   |
| 45° | 0.7071   | 0.7071   | 1.0000   |

| 角   | 正弦 (sin) | 余弦 (cos) | 正接 (tan) |
|-----|----------|----------|----------|
| 45° | 0.7071   | 0.7071   | 1.0000   |
| 46° | 0.7193   | 0.6947   | 1.0355   |
| 47° | 0.7314   | 0.6820   | 1.0724   |
| 48° | 0.7431   | 0.6691   | 1.1106   |
| 49° | 0.7547   | 0.6561   | 1.1504   |
| 50° | 0.7660   | 0.6428   | 1.1918   |
| 51° | 0.7771   | 0.6293   | 1.2349   |
| 52° | 0.7880   | 0.6157   | 1.2799   |
| 53° | 0.7986   | 0.6018   | 1.3270   |
| 54° | 0.8090   | 0.5878   | 1.3764   |
| 55° | 0.8192   | 0.5736   | 1.4281   |
| 56° | 0.8290   | 0.5592   | 1.4826   |
| 57° | 0.8387   | 0.5446   | 1.5399   |
| 58° | 0.8480   | 0.5299   | 1.6003   |
| 59° | 0.8572   | 0.5150   | 1.6643   |
| 60° | 0.8660   | 0.5000   | 1.7321   |
| 61° | 0.8746   | 0.4848   | 1.8040   |
| 62° | 0.8829   | 0.4695   | 1.8807   |
| 63° | 0.8910   | 0.4540   | 1.9626   |
| 64° | 0.8988   | 0.4384   | 2.0503   |
| 65° | 0.9063   | 0.4226   | 2.1445   |
| 66° | 0.9135   | 0.4067   | 2.2460   |
| 67° | 0.9205   | 0.3907   | 2.3559   |
| 68° | 0.9272   | 0.3746   | 2.4751   |
| 69° | 0.9336   | 0.3584   | 2.6051   |
| 70° | 0.9397   | 0.3420   | 2.7475   |
| 71° | 0.9455   | 0.3256   | 2.9042   |
| 72° | 0.9511   | 0.3090   | 3.0777   |
| 73° | 0.9563   | 0.2924   | 3.2709   |
| 74° | 0.9613   | 0.2756   | 3.4874   |
| 75° | 0.9659   | 0.2588   | 3.7321   |
| 76° | 0.9703   | 0.2419   | 4.0108   |
| 77° | 0.9744   | 0.2250   | 4.3315   |
| 78° | 0.9781   | 0.2079   | 4.7046   |
| 79° | 0.9816   | 0.1908   | 5.1446   |
| 80° | 0.9848   | 0.1736   | 5.6713   |
| 81° | 0.9877   | 0.1564   | 6.3138   |
| 82° | 0.9903   | 0.1392   | 7.1154   |
| 83° | 0.9925   | 0.1219   | 8.1443   |
| 84° | 0.9945   | 0.1045   | 9.5144   |
| 85° | 0.9962   | 0.0872   | 11.4301  |
| 86° | 0.9976   | 0.0698   | 14.3007  |
| 87° | 0.9986   | 0.0523   | 19.0811  |
| 88° | 0.9994   | 0.0349   | 28.6363  |
| 89° | 0.9998   | 0.0175   | 57.2900  |
| 90° | 1.0000   | 0.0000   | —        |

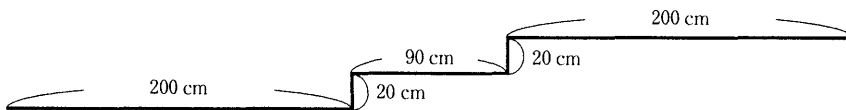
問 3 高齢者がよく利用する階段があります。図3は、この階段を、それぞれ真横と、真上から見た図です。あなたは、バリアフリー法施行令第十三条に基づいて、この階段に代わる傾斜路の設置案を提案します。設置する傾斜路の水平距離は490 cm以内とします。このとき、以下の(1)、(2)に答えなさい。

(1) 解答欄に、あなたが提案する傾斜路のイメージ図をかきなさい。イメージ図はどのように表現しても良いが、その際、以下の①～④に留意すること。なお、定規等は用いず、フリーハンドでかくこと。

- ① あなたが提案する傾斜路がわかるようにすること。
- ② 傾斜路に付帯して設置したい設備等をイメージ図に入れること。
- ③ ②の設備等が、何を表しているかを簡潔に説明すること。
- ④ 指定すべき寸法は明記すること。

(2) (1)のように提案した理由を250字以内(句読点を含む)で説明しなさい。説明の中に、あなたが提案した傾斜路の勾配の値も含めること。

(真横から見た図)



(真上から見た図)

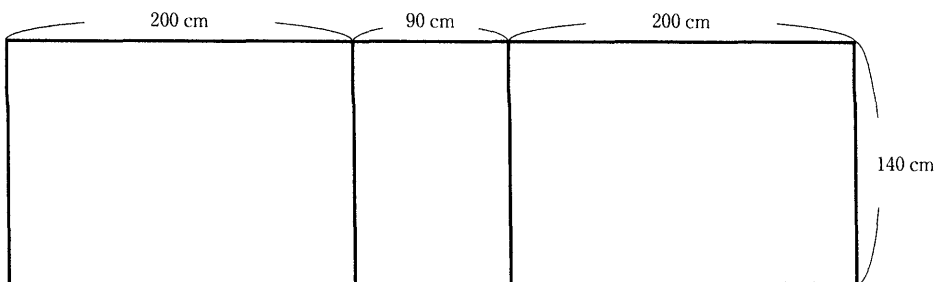


図 3

3 【選択問題】 次の三つの文章を読み、以下の問1～問3に答えなさい。

ア

1978年にノーベル経済学賞を受賞した、ハーバート・サイモンという人工知能・認知科学のパイオニアがいます。彼は、「アテンション・エコノミー〔「注意力の経済」や「関心経済」と訳される〕」という、次のような重要な発想を提示しました。

「情報が溢れた世界において、情報の豊富さは何か別なものの欠乏を意味する。情報は受け手の注意力を消費する。受け手の注意力に働きかけることにより、情報は価値を持つ。情報のサプライヤー〔提供者〕にとって、受け手の注意力は奪い合うべき資源である。彼らは競って、その受け手の注意力に向けて情報を発信する」。

情報が氾濫すれば、情報の価値を生み出している何かが希少になる。その希少資源とは、情報の受け手の注意力、意識、時間であると言うわけです。

しばしば「意識は時間の関数だ」と言われます。時間に比例して意識が成立するという意味です。いくら寝ずに頑張ったところで、人間は1日24時間しか持つことができない。メディアはその時間にたいして働きかける。そうすると当然、注意力の奪い合いになるわけです。

少しでも視聴率を上げるために、テレビは我々に向かって注意力を喚起する。注意力が意識の入り口だからです。しかし、ハイパーテキスト(注)を利用したデジタル・メディアのコミュニケーションが大きく発達したことにより、人間の注意力をめぐる競争が爆発的に激化しているわけです。ネットのおかげで、我々のメディア生活はどんどんマルチタスクになっている。パソコンの画面にはいろんなところにリンクが貼られていて、それらのリンクは「今読んでいるページから、私のページに来てください」としきりに私たちに呼びかけている。

テレビならチャンネルを変えるという選択肢だけですが、ネットの出現により、パソコンで文書をつくりながら、メールに答え、ヤフーでニュースを知り、そこからリンクされているYouTubeを見て、アマゾンに書籍の注文

を入れるというように、いちどに複数の異なる作業をマルチタスクで行うということが一般化すると、人びとの注意力はさらに分散・断片化されていきます。ますます激しく奪い合われる希少資源となるわけです。至るところで、ネットに接続している私たちを取り囲んで注意を惹くための競争が行われるようになります。

例えば、アイトラッカーというのは視線の動きを記録し分析するための装置ですが、アイトラッカーのような装置を使って視線の動きの分析によってウェブサイト上の広告料を決定する。実際にヤフー、グーグルなどの検索ポータルでも、画面の部分によって広告料が異なる。例えば、画面の左上の部分は、みんながよく見るところなので、広告料が高く、右下の部分にはあまり目が行かないから、広告料が安い。人間の注意力には法則性がありますから、それに基づいて広告料も変わります。注意力を喚起するテクノロジーは、私たちの日常的な情報生活の至るところに配備されています。広告というのはたいてい「私のことを見てください」と、人びとの注意を惹きつけることがそのままメッセージになっています。起きて何かに注意を払っている時間をめぐっての競争そのものが、産業の原理になっていくわけです。

(出典：石田英敬『大人のためのメディア論講義』による。なお、出題にあたり本文の一部を改変した。)

(注) コンピュータで、ある文書(ウェブページ)の一部から関連する他の文書を参照したり、その文書に移動したりすることのできるしくみ。

イ

「2016年はフェイクニュース元年である」といわれる。それは、2016年末に行われた米国大統領選挙において、大量のフェイクニュースが作成・拡散されたためだ。例えば、ローマ教皇とドナルド・トランプ氏の写真を掲載したうえで、「ローマ教皇がトランプ氏支持を表明、世界に衝撃」というタイトルを付けて報じたニュースメディアがあった。文字通りかなり衝撃的な内容であるが、これはフェイクニュースであり、事実と異なる。当時、ローマ教皇はメキシコとの間に壁を作ると主張するトランプ氏をむしろ批判していた。

このようなフェイクニュースが生み出される背景には様々なものがある。例えば、熊本地震の時に「動物園からライオンが逃げた」という投稿をした人は、ネタで面白いと思ってやったのだろう。また、芸能人などの根も葉もない噂が広まるのは、多くの場合思い違いを基としており、こうしたものも少なくない。さらに、メディアが誤ることもある(誤情報)。しかし、何らかの意図を持って作成された偽情報の多くは、大きく分けて「経済的動機」と「政治的動機」の2つで作成されている。

例えば、2016年の米国大統領選挙では、米国から9000 km以上離れた東欧の小国に住む学生が、大量のフェイクニュースを作成していたことが分かっている。少なくとも数百人の住民がフェイクニュース作成に携わり、100以上の米国政治情報サイトが運営されていたようだ。そしてそのフェイクニュースの多くが、トランプ氏の支持者に向けたものであった。

なぜ、このように米国と全く関係のなさそうな国の学生がそのようにフェイクニュースを作成していたのだろうか。当然、彼らは政治的立場から、遠い米国でトランプ氏を勝たせたかったわけではない。実は彼らの狙いは、記事の作成・拡散による莫大<sup>ばくだい</sup>な広告収入にあったのである。彼らは、米国の右翼系ウェブサイトなどから、完全に剽窃<sup>ひょうせつ</sup>したり、寄せ集めたりした情報に扇動的な見出しを付けて公開し、拡散を狙っていた。特に右翼ネタほど拡散されやすいことから、トランプ氏を擁護するようなフェイクニュースが大半を占めたということである。数か月で親の生涯年収分稼いだ者もいるようだ。

インターネットの普及により、広告収入を軸としたウェブサイトが大量に生まれた。そのようなウェブサイトにとって一番重要なのが、PV(ページビュー)<sup>(注1)</sup>数を稼いで少しでも多くの広告収入を得ることである。広告収入のカウント方法としては、PV数に応じたもの、広告クリック数に応じたもの、実際に広告先で購入した数に応じたものなど様々あるが、いずれの場合もいかにして自分のウェブサイト到人を呼び込むかがカギになる。その時に重要なのが、情報の質よりも「人々の関心を多く惹く」こととなるわけである。

加えて、誰もが簡単にメディアを創設できる現代では、既存のマスメディアと大きく異なる原理で記事が作成される。どういうことかという、例えば新聞などのマスメディアの媒体は、消費者からメディアを選ばれる競争があるために、メディア自体の「質」を向上させて顧客を増やす必要がある。例えば、1社がフェイクニュースばかり垂れ流していたら、誰もその会社の新聞は購読しなくなるだろう。

しかしインターネット記事はそうではない。人々は媒体でニュースを読むというより、検索エンジンで検索したり、ソーシャルメディア<sup>(注2)</sup>で拡散されたりしている記事を見て、記事単位で閲覧する。その情報ソースがどの会社なのかは二の次である。そのような場合は、質の高い情報を発信してメディアとしての信頼度を高めるよりもセンセーショナルな見出しを付けてソーシャルメディアでシェアされやすい記事にしたり、検索サービス対策をして記事が検索の上位に来るように工夫したりしたほうが短期的に儲かる<sup>もう</sup>。その結果、人々の目を引くように工夫されたフェイクニュースが量産されるのである。

もう1つの政治的動機については、自国内、あるいは他国から、何らかの政治的意図を持ってフェイクニュースがもたらされるケースである。ミャンマーでのロヒンギャ<sup>(注3)</sup>弾圧に使われていた数々のフェイクニュース(ロヒンギャが仏教徒を殺害しているなど)は正にプロパガンダ<sup>(注4)</sup>といえるもので、政府が意図的に流したフェイクニュースといえるだろう。また、米国の保守派、共和党員などは、民主党のオバマ元大統領について、「米国生まれではないので大統領になる資格がない」と主張していた。米国は国籍につい

て出生地主義を採用しているため、出生地がケニアであるオバマ元大統領は大統領になれないというものである。これはオバマ元大統領が出生証明書を公開したことで落ち着いたが、それ以降でも出生証明書が偽造されているという主張が残り、公開後の2011年5月の調査でも13%の米国人がオバマ元大統領は他の国で生まれたと考えていることが分かっている。2016年米国大統領選挙に際しても、ロシアが選挙介入工作を行ったといわれている。(出典：山口真一『ソーシャルメディア解体全書』による。なお、出題にあたり本文の一部を改変した。)

- (注)
- 1 ウェブページの特定のページが開かれた回数のこと。
  - 2 インターネットを利用して誰でも手軽に情報を発信し、相互のやりとりができる双方向のメディアのこと。SNS(ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス)のほか、動画共有サービスや電子掲示板などが含まれる。
  - 3 ミャンマー西部に住むイスラーム系少数民族。
  - 4 政治的な意図のもとに行われる情報の流布のこと。

## ウ

あなたは「家族が地震で下敷きになっている」という投稿を X(旧 Twitter)で見かけたら、どのような対応をするだろうか。メディア関係者ならば、この投稿だけで慌てふためいて周囲に知らせたり報道したりすることはないはずである。情報の裏づけを取り、十分な確証が得られてから、初めて「伝える」という行動をとるはずである。

しかし一般の人はそうはいかない。令和6年能登半島地震において、Xに具体的な住所とともに「息子が挟まって動けない。私の力では動かない。頼みの綱が X しかない。助けて」という投稿があった。この住所に住んでいた石川県の40代の女性に、知人や警察から多くの問い合わせがあった。しかし女性の自宅は、物が散乱する程度の被害で、そもそも息子がいなかった。身に覚えのない投稿をされた女性は、「災害時に警察の業務を妨害して許せない」と憤っている。

「地震で車に閉じ込められて、身動きがとれない(実際の住所が明記)」「地震が人工的に起こされた」「能登半島に外国系の盗賊団が集結中」「避難所を出ると仮設住宅に入れなくなる」——これらも能登半島地震で発生した根拠のないデマである。

SNSの発達によって、一般の人もさまざまな情報を不特定多数に広く発信できるようになった。これにより、被災場所と被害状況を早期に特定して、効果的な救助・救援に結びつけることが可能となった。一方で、根拠のないデマも多く発信され、さらにそれを善意の第三者が拡散することで、消防や警察、地元自治体に問い合わせが殺到し、活動の大きな妨げになることも増えてきた。2016年熊本地震では、「動物園のライオンが街中に逃げ出した」として虚偽の写真とともに投稿され、動物園をはじめとした公的機関がその対応に追われた。

(出典：木村玲欧「能登半島地震でも巻き起こるデマ 過去の災害から見える傾向」による。なお、出題にあたり本文の一部を改変した。)

- 問 1 文章 **ア** における下線部「起きて何かに注意を払っている時間をめぐっての競争そのものが、産業の原理になっていく」ことについて、それはなぜか、この文章 **ア** の内容を踏まえて 150 字程度(句読点を含む)で説明しなさい。
- 問 2 文章 **イ** にて述べられている、偽情報としてのフェイクニュースが作成される経済的動機について、文章 **ア** の内容と関連づけながら、300 字程度(句読点を含む)で説明しなさい。
- 問 3 文章 **ア**、**イ**、**ウ** のいずれか二つ以上の内容を踏まえながら、ソーシャルメディアを含むインターネット上の情報について、その特徴をいかした活用のしかたを 300 字程度(句読点を含む)で論じなさい。